



解題

アシュラムとはインドの言葉で「退修」という意味で、スタンレー・ジョーンズ博士によって日本に紹介されたものであります。祈りの生活をもって前に自らを整え、今日に於ける主のご委託にこたえんというのがその願いです。

2026. 1月第686号

発行所 アシュラムセンター
523-0894 近江八幡市中村町 567-2
Tel 0748-33-4030
Fax 0748-33-8856

アシュラムセンターホームページ
www.ashramcenter.jp

編集 アシュラム誌編集委員会

振替 01050-6-53772
アシュラムセンター

印刷 明文舎印刷商事(株)

この秋、日本各地で熊の出没が相次ぎ、私たちは大きな驚きを感じた。ここ近江八幡でも目撃情報（のちに誤報と判明）、町全体に緊張が走った。市街地を縦横に駆け抜け、スーパーマーケットに入り込み、柿の木に登って悠然と実を食べる——そのような熊の姿が、テレビ画面に繰り返し映し出されたのである。しかし、何よりも慄然とさせられたのは、人が襲われ、尊い命が奪われる痛ましい出来事が続いたという事実である。新聞配達途中に、きのこ狩りの最中に、露天風呂の清掃中に、そして朝起きがけの玄関先に——日常のひとつこまに突然、恐怖が割り込んでくる。

かつてテレビのドキュメンタリー番組で、象による被害に苦しむスリランカの農村を取材した映像を見たことがある。村人たちは畑を荒らされ、家を壊され、その恐怖を口々に語っていた。暗闇の中で花火を打ち上げ、必死に象を追いかける。そこにいたのは、動物園で穏やかに水を浴びる「ぞうさん」ではなく、人を踏み潰し、村を脅かす巨大な野生動物であった。

そして今、私たちの目の前にある熊出沒の現実もまた、童謡・唱歌「森のくまさん」で歌われる愛らしいクマとはまったく別物である。熊も象も、自然界で生きる野生の命なのである。今月のみ言葉は、よく知られたノアの箱舟の物語である。墮落した人間の行いを見て、神は創造を悔やみ、

瞑想

獣、這うもの、鳥、地に群がるもの、それぞれすべて箱舟から出た。

創世記8章19節

主幹牧師 榎本 恵

の中に、清くないものを混ぜて入れられた。アダムとエバを誘惑した蛇を含む、地を這うものまでもである。洪水が止み、地が現れたとき、それらは箱舟から出てきた。神は、新しい世界の始まりにあっても、蛇——悪の象徴とも見なされる存在——を排除されなかった。強いものも弱いものも、好まれるものも忌避されるものも、すべてを包み込む世界。それこそが神のつくられる世界である。

熊も象も、人の生活圏を脅かすとき、私たちはそれを「害獣」と呼び、恐れ、嫌い、排除しようとする。しかし神にとつては、どの命も待ち望むべき大切な存在である。人間中心の秩序ではなく、神の秩序の中にあって、神は清くないものをも招かれるのである。

かつてベトロは、天から降りてくる布の幻を見た。「その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。」（使徒言行録10章12節）

神はそれらを食べよと命じ、清くないものを拒むベトロを戒められた。「神が清めたものを、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」

これがやがて、キリスト教会の異邦人伝道への神の召しとなったのである。私たちは、自分の好ましいものだけが救われることを望みがちである。しかし、すべての被造物が救いを待ち望んでいる——これこそが聖書の証しである。蛇も、象も、熊も、あらゆる命が新しい地の到来を待ち望んでいるのである。

友よ、獣も、這うものも、鳥も、地に群がるすべてのものは箱舟から出て、新しい地へと歩み出した。この新しい地は、決して排除したり、駆除したりする世界ではないはずである。新しい年、私たちは、すべての命が救いのうちに入られる日を信じ、待ち望む者となろうよ。

アシュラムセンター 創立50周年記念企画

アシュラムセンター職員(?) 紹介(3) (1976年4月号)アシュラム誌より

文責: 榎本保郎

岡崎澄..
センター専従職員

40年の小学校の教師に終止符をうつ

てアシュラムのために名実共に献身しておられます。几帳面な姉妹はセンターにとってなくてはならぬ存在であります。ややこしい事務や全国から寄せられる便りを黙々として処理してくださっています。たのみがいのある人です。

榎本和子..
センターのまかない婦

この人の笑顔を見ただけでもなぐさめられるなど持ちあがる人がいます。本当かな、としげしげ見つめても、30年も見て来たので余り感激はありません。ただ真実なことだけは夫である私も心から尊敬しています。



岡崎姉

和子母

高校生アシュラムの感想(49年前)

(アシュラム誌1976年8月号より)

中道 基夫

「はい、これがあなたの袋です。」と大きな袋を渡された。自分の部屋に行き、まだ時間があるのでベッドの上で、いまもらった袋の中身を確かめてみると、その中に「アシュラム」と書いた一冊の本があった。

1ページ、2ページとめくるとプログラムのわからない言葉が、三つ四つあった。それを見たとき、マラソンのスタートラインに立ち「よい」のかけ声をかけられた時のような緊張感を覚えた。開会礼拝においてスタートして、走りきれぬだろうかという不安でいっぱいでした。

そして、初めはただ走りきればよいのだと

いうだらけた気持ちでしたが、静聴の時、ファミリー、聖書講義を終えていくとなにか全力で走らねばたまらない気持ちになっていました。

次の朝がなんとすがすがしい朝だったでしょう。今までの自分のだらけをはきちらすように太陽が輝いていました。

また、ファミリーの時、自分の悪いところをみんなの前にさらけだした後のすがすがしさは、本当に新しい生活への出発という感じがします。

ファミリーは、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さんがいて、本当の家族のように感じました。祈ることも覚えました。初めは、祈り、祈り、祈り

でいやだなと思っていたりましたが、祈りがなんと素晴らしいものであるかと思ひ直しました。今からは御心に沿う

アシュラムセンター

50周年記念会参加の感想

李天謝

深く実感しました。

今年、アシュラムセンターの創立50周年記念会に参加できたことは、私にとって、まるで人生の中で「歴史・信仰・生命が交わる一点」に招かれた旅のような体験でした。記念会の中で、アシュラムの方々の献身と継承、そして豊かな証しに触れ、さらにアシュラムセンターが創立初期から今日に至るまで歩んできた軌跡を振り返ることができ、「召命とは一時的な熱意ではなく、生涯にわたる従順である」ということを

「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊か

よう歩んでいきたいです。

(現在関西学院院長)(当時高校生、明石教会所属)(今回の50周年記念礼拝にて説教のご奉仕を！)

な実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」(マルコ4:26-29)

特に心を動かされたのは、日本のさまざまな教派から来られた多くの働き人が、静かに、そして肅々と奉仕されている姿でした。

私が不注意で転んで少し怪我をした際、面識のないスタッフの方が、薬やカード、飴を袋に入れてわざわざ届けてくださり、その心遣いに深く励まされました。信仰の成熟とは、「どれほど多くの働きをしたか」ではなく、「日々の生活の中で三位一体の神に造り変えられることを願って歩む姿勢」にあるのだと、改めて示された出来事でした。

また、主催者の皆さんは、日本の国際水準の古典音楽・現代音楽・バレエの夕べに加

えて、台湾の多文化を代表する太魯閣族の歌舞、排湾族の八名の牧師による美しい合唱など、豊かなプログラムを準備してくださいました。

最後には、クリスチャン・アシラム創始者である米国メソジスト教会の宣教師E・スタンリー・ジョーンズ博士の孫娘アン・マシユーズ氏が、ゴーギャンの名画を通して「私たちはど

こから来たのか？ 私たちは誰なのか？ どこへ向かうのか？」という問いを投げかけ、深い感銘を受けました。

さらに、京都近郊にある、日本の禁教時代

に天主(カトリック)のために殉じた信徒を記念する碑を訪れたことも忘れられない経験となりました。

参加日本 Ashramcenter 50 周年記念心得

李天謝 (台灣基督教長老教會正忠教會 傳道人)

今年能夠參加日本愛修會成立 50 周年紀念活動，對我來說像是一生中被邀請進入歷史、信仰與生命交會點的旅程。在紀念會中看到原本家族成員的委身和傳承及蒙福的見證分享、回顧愛修會從創立初期到如今的軌跡，都讓我真誠感受到「呼召不是一時的情緒，而是一生的順服。」愛修中心是一個跨教派的基督教團體，以祈禱的生活在耶穌基督面前整頓自己，並回應主在今日對我們的託付「又說：神的國如同人把種撒在地上。黑夜睡覺，自起來，這種就發芽漸長，那人卻不曉得如何這樣。地生五穀是出於自然的：先發苗，後長穗。再後穗上結成飽滿的子粒；穀既熟了，就用鐮刀去割，因為收成的時候到了。」(馬可福音 4:26-29)

特別感動的是，看見許多來自日本各不同宗派的教會同工，默默取事，在安靜的操練中，持續活出愛和修復的精神。譬如說當我不小心跌倒受了小傷後，竟然有不會認識的同工特別託人送來一小包的藥品、卡片。結果轉達關心和慰問，提醒了我信仰的成熟不在於做了多少事情，更在於是否願意在日常生活中不斷被三位一體(聖父、聖子、聖靈)的神塑造。

另外主辦單位也安排了日本知名的國際水準的古典和現代音樂及芭蕾舞晚會活動及包括來自台灣不同的多元文化的太魯閣族的歌舞及排灣族八個牧師美妙合聲。最後晚會結束在來自愛修會創辦人—英國南理公會傳教士 E. 史丹利。瓊斯博士的孫女 Anne Mathews 以高更的名畫質問我們從那裡來？我們是誰？我們要往那裡去？

更令人難忘的是參觀在京都附近過去日本禁教時期為主殉道男信徒的紀念碑。這次 50 年的主題是「這樣，你們就把五十年分別出來，向全體居民宣佈這一年為自由年，為禧年。」(利未記 25:10)

作為神所揀選的人，即使處在這個快速變化的 AI 時代，無論在家庭、教會、職場環境中都要找出神給你的獨特權一的恩賜，把有限時間盡全力以赴的使命，榮耀神幫助身邊的人。所謂謙卑在人，成事在天。最後我要向這次為 50 週年活動出動、出力的所有成員致以最深的謝意、感謝主，願主記念你們的辛勤工作和奉獻精神。

のすべての住民に自由の年として告げ知らせなさい。これはあなたがたのヨベルの年である。」(レビ記 25:10)

でした。

神に選ばれた者として、たとえ AI 時代のように急激に変化する社会にあっても、家庭、教会、職場、それぞれの場で、神が与えてくださった唯一無二の賜物を用い、限られた時間の中で与えられた使命を全力で果たすことを求められているのだと感じます。「人事を尽くして天命を待つ」。この言葉の通りです。

最後に、この 50 周年記念大会のために費用や力を注ぎ、陰に日向に支えてくださったすべての皆さまに、心より感謝を申し上げます。主がその労苦と奉仕を豊かに覚えてくださいますように。

(台灣基督教長老教會・正忠教會 伝道者)



◀キリシタン殉教の跡を巡るツアー開始！筆者・左端

アシュラムセンター創立50周年記念礼拝の祈り(船・向こう岸・荒波を意識)

主なる神よ、

今日、私たちはアシュラムセンター創立50周年という節目にあたり、あなたの前にひざまずきます。

初代主幹牧師、榎本保郎が聞いた声——「向こう岸へ渡ろう」という呼びかけに導かれ、先達たちはまだ見ぬ地に船を漕ぎ出しました。その矢先、わずか2年で彼は天に召され、先達たちは指導者を失い、途方に暮れました。

しかし、彼らは人ではなく、ただ神にのみ頼ることを選びました。残された兄弟姉妹たちは、主の約束を信じ、再び船を向こう岸へと漕ぎ出したのです。

もちろん、それからの道も決して平坦ではありませんでした。二度の大きな地震、経済の危機、世界が戦争へ向かうのではないかという恐れの中でも、彼らはただ主にのみ頼り、祈りとみ言葉を力として、荒れた海を越え、揺れる船を守りながら進みました。その歴史は、信仰に生きる者がいかに深く主に信頼できるかを示す証です。

この50年目の節目——ヨベルの年、神が時を聖別される年に、私たちはこれまでの航路を振り返ります。そこに注がれた主の憐れみと祝福に、感謝せずにはおれません。神は決して私たちを孤児とはされず、かえって祝福をお与えくださいました。それは大きな喜びであり、深い感謝であります。

しかし、主よ、ここは到達点ではありません。この50年は、新たな船出の始まりであり、未来への出発点です。まだ見ぬ向こう岸が私たちを待つ道にあっても、あなたは必ずこの船に共におられ、友として、舵取りとして、嵐の時も共に進んでくださることを信じます。

どうか私たちの手を導き、心をつにし、初代牧師の祈りと希望を、私たちの上に重ねてください。

これからの50年、そしてその先の未来に至るまで、あなたの臨在と恵みが絶えず私たちの船を照らし、守り、導いてくださいますように。

イエス・キリストの御名によって、
アーメン。



「イエスは主なり！」記念アシュラム始まりの挨拶



11月22日天上の友を憶える日礼拝、聖霊の風吹くシメオン庭にて。猪瀬和子姉、奥村文子姉、河村琢郎兄(康子父)のご家族、プレート作家の田ヶ原ご夫妻他、アシュラムの皆様方が、集い祈り賛美くださった。

この度の50周年記念のため、皆様方のお祈り、ご献金、そしてご奉仕、心より感謝申し上げます。早々のご感想をお寄せ下さった方々もおられ感謝です。次号より掲載させて頂きます。皆様からのお便りもお待ちしています。

シメオンの風8 「卓上カレンダーと裏切りモミジ」

市橋 恵子

アシュラムセンター 50 周年記念のお祝いに「シメオン黙想の家 2026」卓上カレンダーをいただきました。美しいシメオンの建物と周囲の自然が映し出された 12 枚の写真集でもあります。その中に、シメオンの庭のモミジを映したものが二枚ありました。一枚は 5 月の青もみじ、もう一枚は 11 月の紅葉です。

5 月の青モミジは葉の一枚一枚が光に向かって飛び跳ねているようで明るく、すがすがしい。11 月の写真はシメオンの玄関の八極星のような形をした採光窓から入り口のアプローチ越しに見える紅葉にほかしが掛かっています。それを見ながら、「こいつは裏切りモミジなのよね」と私はおもわずつぶやかずにはられません。

11 月に見るモミジの葉はどんよりした茜色なのです。まるで、今年の紅葉は色づき悪くてごめんなさいといっているような。「え、これで終わり？ 今年の色づきはあかんかったねえ」とため息つきたくなるような。しかし、12 月の第 2 週くらいになると、なんとということでしょう。あのどんより茜色のモミジがまるで埃が洗い落とされたあのように透き通った見事なルビー色のモミジに変わるのです。シメオンに通い続けて 5 年。毎年私はこのモミジに裏切られ続けています(いい意味で)。いや、これは紅葉を期待しすぎる自分の早合点。神様はその一番良い時に自然を輝かせてくださいます。なお、榎本光太さん撮影・編集のこのシメオンカレンダーお勧めです。



いえじま 雑記 31 「翻訳とは??」



年の瀬に入り、来春に出る予定の訳書の校正に追われる毎日です。翻訳は山登りのようにいつも思いますが、ひと通り訳しおえたあとの校正作業は差し当たり山を降りるようなものでしょうか。スイスイ進むようにも思うのですが、油断大敵。思わぬところに訳し間違いや表記のゆれなどが潜んでいて、何度読み直しても、修正箇所が出てきます。まるでいちいち雑草を引っっこ抜きながらゆっくり山を降りているようです。

あらゆるものがとんでもない速さで消費され、現れては消えていくなか、そういう翻訳のスピードは遅々としたものなのですが、そうやってゆっくりと立ち上がる言葉には愛着を感じてしまいます。ようやく下山して、その山をふもとから見上げると、完璧からは程遠い雑草だらけのその山は、しかしほかのどの山も違って見えるのです。クリスマスがきて、一年が終わり、また新しい一年がはじまります。矢のようにすぎていく日々が少しでもゆっくりになるように願いながら、僕は翻訳のスピードに身を沈めます。もしかしたらそれは祈りのスピードにも近いのかもしれません。皆様、よいクリスマスをお過ごしください。

榎本 空(ノースカロライナ大学院生、沖縄伊江島在住)



←12月3日、神戸イエス団教会との平和合同祈禱会、15回目！今年の講師は河崎靖教授(京都大学)(恵師右隣)ボンヘッファアの生き方、思想を学び、今、再び平和への祈りを共に！遠路神戸より上内師共に3名感謝。



←初！シメオン庭に、大きなリース！和田モッド姉渾身の作。皆様に喜ばれてます。

あとがき

新しい年、新しい歌を歌おう。

アシュラムセンターは祝福のうちに、50周年を迎えることができました。いよいよ、私たちは新たな船出に出発しようとしています。

2026年のアシュラムセンターの働きも、1月の第51回の年頭アシュラム、2月ブラジルアシュラム、3月台湾アシュラムと続いてまいります。

「人は変わり、世は移れど、主は御心なし給わん」。確かにこの賛美のように、50年の時の流れは大きいものです。しかし、その中でも決して変わらぬものがあります。

「不易と流行」、変わらなければならぬものと変えてはならないものを、見極めながら、この新しい一年も歩んでまいりますので、どうぞアシュラムセンターの働きを覚え、今年もまた祈り支えていただきますようお願いいたします。私たちも祈っております。(恵)

中止、又はオンラインに変更もあり。
ホームページ、電話等でご確認下さい。直前の変更の場合あり！

【主な問い合わせ先】0748-33-4030 アシュラムセンター
【Zoom・インターネット等 問い合わせ先】080-3983-8140

1月の聖書教室など

4(日)	ちいろば牧師記念チャペルタ礼拝 (PM5:00)
6(火)	Zoom聖書教室 (Zoom PM7:30)
9(金)	阪神ミニアシュラム (神戸聖愛教会 PM1:00)
10(土)	加古川祈りの家 (フリーメソジスト加古川教会 PM1:00)
20(火)	大阪聖書教室 (大阪クリスチャンセンター AM10:30)
21(水)	みんなのカフェちいろば聖書入門講座 (京都・伏見区深草 PM1:30)
26(月)	静岡聖書教室 (旧・英和女学院宣教師館 AM10:00、PM1:30)
27(火)	東京聖書教室 (御茶ノ水クリスチャンセンター 4F AM10:30)
27(火)	しみじみする会 (桜美林大学 荊冠堂チャペル PM2:30)
30(金)	センター聖書教室 (アシュラムセンター AM11:00)
2/6(金)	阪神ミニアシュラム (神戸聖愛教会 PM1:00)

1月のアシュラムなど

12(月) 14(火)	第51回 年頭アシュラム(申し込み受付中!) 0748-33-4030 奉仕者 榎本 恵師/金田 佐久子師 アシュラムセンター
24(土)	バプテスト連盟 0748-33-4030 ふじみキリスト教会アシュラム アシュラムセンター 奉仕者 榎本 恵師

2・3月のアシュラム予定

2/11(火) 2/24(火)	ブラジル伝道旅行 0748-33-4030 奉仕者 榎本 恵師 アシュラムセンター
3/2(月) 3/4(火)	第43回 台湾愛修會



←和子母著『ちいろばの女房』に聖句をサインする和子母。2016年1月21日、イスラエルよ、主によって望みをいだけ。詩一三一・三

献金のお願い

創立50周年のため祈りお献げ下さった皆様、感謝致します。引き続きお祈りとご献金をお願い申し上げます。

キャッシュレス献金はこちらのQRコード
または「オンライン献金.com」と検索ください。
アシュラムセンター運営
記号番号 01050-6-53772



みことば



日本キリスト教団 豊島岡教会
南花島集会所 牧師 江口公一

11章 「キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。」(Ⅱコリント11:23)

11章は「あなたがたに対して、神が抱いておられる熱い思い(嫉妬)を私も抱いています。」(2)という現状への問題提起から始まります。コリント教会をキリストの花嫁とするため神の前で婚約させた者として、教会が他の神に心を向けようとしているのではないかと神の嫉妬をパウロも自らの思いとして抱き、心配しているのです。

理由として、「あなたがたは、だれかがやって来てわたしたちが宣べ伝えたのとは異なったイエスを宣べ伝えても…違った霊や…違った福音を受け入れることになって、よく我慢しているからです」(4)と記しています。

コリント教会にやって来た人々は、パウロを「弱々しい人で、話もつまらない」(10:10)と批判した様で、パウロは彼らを「あの大使徒たち」(5)「偽使徒」(13)と呼びました。彼らが語ったイエスは、十字架の死を強調しない神の力を帯びた強いイエス、霊は、人を預言する状態にさせる霊、福音は、神の力とキリストの行いによって弱さと死を克服し勝利と復活の命を得る事だったでしょうか。当時のユダヤ教の教えと整合していたと思われます。力が支配する世の論理の延長にも思えます。パウロは、かつての自分自身の誤った神信仰を思い起こしたでしょう。

これに対して、パウロが伝えたイエスは、「神の弱さは人より強い」「十字架につけられたキリスト」(1コリ1:23~25)でした。霊は、一人一人に教会を作り上げる賜物を分け与える霊(1コリ12:4~11)、福音の言葉は、パウロも受け継いだ「キリストが聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、…三日目に復活したこと、…十二人に現れたことです」(1コリ15:3~5)でした。この十二人に連なる多くの「使徒」の最後に、一番小さな値打ちのない者であったパウロにもキリストは現れ「使徒」とされたのです。

パウロは、自分も彼ら以上に「キリストに仕える者」とであると、「気が変になったように」証しました。同胞からも異邦人からも苦難を受け、その上、日々迫る全ての教会の心配事があった(23~28)と。引き裂かれた世にあって、力によらず、弱さを十字架と共に負われる主に仕え、和解の奉仕をする者が導かれるのは、このキリストの証しだと思います。



「早天誕生者への祈り」
お一人お一人の歩みが

どんなに迷い出ても 主は必ず捜し出し 連れ帰って下さる方…
あなたの大きなふところへと はね返る時であることを信じ、歩むことが出来ますように。

詩119(テト) 恵